

「日本外交史 その参」

黒田裕樹（ブログ「黒田裕樹の歴史講座」）

1. 室町幕府の誕生と南北朝の動乱

前回（第 61 回）の「日本外交史 その弐」で詳しく紹介した「元寇(げんこう)」が起きた当時は、鎌倉幕府と主従関係を結んでいた御家人(ごけにん)が、自己の所領を幕府に保証してもらおうという「御恩(ごおん)」に報いるかたちで、幕府からの要請があれば自費で様々な軍役(ぐんえき)に就(つ)くなどの「奉公」を行うというシステムが定着していました。

軍役による御家人の負担は大きいものがありましたが、活躍次第では新たな所領を得られるため、御家人たちはそれこそ一所懸命に務めていたのですが、時が流れるにつれて、こうした「御恩」と「奉公」の関係は崩れていきました。

当時の武士の社会では、一族の子弟たちに所領を分け与えるという分割相続が一般的でしたが、これを何代も行っているうちに、所領が細分化して農業収入が減少するのに対して、幕府への奉公が変わらずに続いたため、必然的に困窮(こんきゅう)するようになってしまったのです。

やがて御家人の多くが、借上(かしあげ)や土倉(どそう)といった業者から借金をし始めましたが、借金を返済できなくなった御家人の中には、担保として自らの所領を奪われてしまう者も現われるようになりました。

これら御家人の困窮をよそに、幕府では執権を務めていた北条氏の嫡流(ちやくりゅう、正当な血筋を持つ家柄のこと)の当主である得宗(とくそう)の権限が強化されるという得宗専制政治が行われたことで、御家人の心が幕府から離れるとともに、不満が高まっていきました。

「御恩」と「奉公」のシステムが崩壊して鎌倉幕府の将来に暗雲が立ち込めた頃、朝廷においても皇位の継承に関する大きな問題が起きていました。1246 年、後嵯峨(ごさが)天皇が子の後深草(ごふかくさ)天皇に譲位されて院政を始められると、その後に後深草天皇の弟である亀山(かめやま)天皇に譲位させ、さらに亀山天皇の子の世仁(よひと)親王を皇太子にされました。

その後、後嵯峨上皇(後に出家されて法皇とされました)が 1272 年に皇位の継承者を鎌倉幕府に一任される形で崩御(ほうぎょ)されると、幕府は世仁親王を後宇多(ごうだ)天皇として即位させる一方で、次の皇太子を後深草天皇の子である熙仁(ひろひと)親王に決めました。

要するに、幕府の調停によって、後深草天皇の血統である持明院統(じみょういんとう)と、亀山天皇の血

統である大覚寺統(だいかくじとう)とが、まるでキャッチボールのように交代しながら皇位につかれることになったのです。いわゆる「両統迭立(りょうとうてつりつ)」が続いたことによって、両統は幕府に働きかけて自己の血統に有利な地位を得ようとするなど、やがてお互いに激しく争うようになりました。

両統迭立が続くなか、対立状態を解消するとともに、我が国は天皇が国家統治の大権を持つという自明のことを武士たちに示し、政治の実権を幕府から取り戻すことをかねてより念願とされていた、大覚寺統の後醍醐(ごだいご)天皇は、北畠親房(きたばたけちかふさ)などの優秀な人材を積極的に登用されました。

後醍醐天皇は討幕の計画を二度も進められましたがいずれも失敗され、幕府によって隠岐(おき)へと流されました。

なお、1324年に起きた一回目の討幕は「正中(しょうちゅう)の変」と呼ばれ、二回目の1331年は「元弘(げんこう)の変」と呼ばれています。

後醍醐天皇が隠岐に流された後、鎌倉幕府は持明院統の光厳(こうごん)天皇を皇位にたてましたが、後醍醐天皇がご譲位を拒否されたため、お二人の天皇が並立されることになり、これが後の南北朝時代のきっかけとなったのです。

さて、後醍醐天皇が京都から追放されてしまわれたものの、子の護良(もりよし、または「もりなが」)親王が父の意志を継ぐべく諸国の兵を募(つ)って幕府に抵抗し続けたほか、幕府に対抗する武士団という意味の悪党(あくどう)の一人であった楠木正成(くすのきまさしげ)は、河内の赤坂城や千早城に立てこもって幕府の大軍と戦いました。

正成はわずかな兵で幕府軍に抵抗を続けましたが、その貢献度は絶大でした。なぜなら、鎌倉幕府は武家政権ですから、大軍で攻め込みながらわずかな兵の正成の軍勢に勝てないということは、それだけ幕府の威信に傷がつくからです。事実、正成がしぶとく戦っている間に、全国各地で討幕の軍勢が次第に集まってきました。

討幕の軍勢が自然と増加していった1333年、後醍醐天皇は隠岐を脱出され、伯耆(ほうき、現在の鳥取県西部)の名和長年(なわながとし)を頼って挙兵されました。

この事態を重く見た幕府は、北条氏と姻戚(いんせき)関係にあった有力御家人を現地へ派遣しましたが、実は、その御家人こそが足利高氏(あしかがたかうじ)でした。

足利高氏は清和源氏の一族であった源義家(みなもとのおよしいえ)の子孫であり、北条氏の御家人の中でも名門の出身でしたが、鎌倉幕府の威信が地に墮(お)ちた現実を見極めた高氏は、幕府に背いて謀叛(むほん)を起こすことを決断しました。

高氏は他の反幕府勢力を率いて京都へ入り、1333年5月7日に六波羅探題(ろくはらたんたい)を滅ぼし

ました。同じ頃、高氏と同じ源義家の血を引く新田義貞(にったよしさだ)も、上野(こうずけ、現在の群馬県)で討幕の兵を挙げて鎌倉へ向かいました。

義貞は、鎌倉を脱出した高氏の子の千寿王(せんじゅおう、後の足利義詮=あしかがよしあきら)と合流して、一緒に鎌倉を攻めました。

5月18日には北条氏最後の執権である第16代の北条守時(ほうじょうもりとき)を滅ぼし、22日には得宗の北条高時(ほうじょうたかとき)や内管領(うちかんれい)の長崎高資(ながさきたかすけ)らを自害に追い込んで、源頼朝以来約140年続いた鎌倉幕府はついに滅亡しました。

鎌倉幕府が倒れた後、直ちに京都へ戻られた後醍醐天皇は、光厳天皇のご即位を否定されたほか、摂政や関白を置かれずに、天皇親政のもとですべての土地の所有権の確認に天皇の綸旨(りんじ、側近が出す天皇の命令書のこと)を必要とさせるなど、天皇に権限を集中させた新しい政治を始められました。

また軍事面では、天皇ご自身が軍隊をお持ちでなかったため、子の護良親王を征夷大將軍(せいいたいしょうぐん)に任命されたほか、旧幕府の本拠地であった関東や東北には、それぞれ鎌倉將軍府や陸奥將軍府が置かれました。

後醍醐天皇によるこれらの新しい政治は、幕府滅亡の翌年(1334年)に改められた建武(けんむ)という年号から「建武の新政」と呼ばれています。

さて、主君に絶対の忠誠を誓うとともに徳のある者が天下を制するとした朱子学(しゅしがく)を熱心に学ばれていた後醍醐天皇にとって、両統迭立によって皇位の継承が不安定になることや、朝廷から政治の実権を「奪っていた」鎌倉幕府の存在は、絶対に許せないものでした。

ご自身が幕府を倒すために何度も討幕の兵を挙げられ、結果として建武の新政が実現できたことは、後醍醐天皇にとっては当然のことであり、このままご自身による親政が永遠に続くとお考えでした。

しかし、後醍醐天皇に味方して幕府を倒すのに協力した武士たちは、勢力が衰えて政治を任せられなくなった幕府の代わりに、他の武士による新しい組織のもとで、これまでどおりの「武士による政治」を続けることを望んでいました。

それなのに、後醍醐天皇は皇族や公家のための政治のみを実行されるだけでなく、これまで守られてきた土地の所有権などの武士の権利がないがしろにされたことで、建武の新政に対する武士たちの不満が次第に高まっていきました。

かつての平家による政権が貴族化した際もそうであったように、いくら武力などで世の中を支配したところで、それが国民の理解を得られなければ、その支配は絶対に長続きできないのです。

今回の場合も、当時の国民の代表たる武士の期待に応えられなかった建武の新政には、やがてかげりが見え始め、そんな不穏(ふおん)な空気を察したかのように、後醍醐天皇から「最高の榮譽」を受

けたはずの一人の武士が反旗をひるがえしたのです。

鎌倉幕府を裏切って京都の六波羅探題を滅ぼした足利高氏に対して、後醍醐天皇はその勲功を称えてご自身の諱(いみな、名前のこと。天皇のような身分の高い人は本名で呼ぶことを避ける習慣があったので、忌み名=いみな、という意味も込められていた)である尊治(たかはる)から一字をお与えになり、「尊氏」と名乗らせました。

このように、身分の上位の人間が下位の人間に対して自分の名前の一部を与えることを偏諱(へんき)といいます(なお、それまで名乗っていた高氏の「高」は、北条高時から同じように偏諱を受けていました)。天皇が身分の低い者、ましてや「ケガレた者」として虫けらのような存在であった武士に対して偏諱を受けさせるのは、空前絶後のことでした。

しかし、尊氏が本当に欲しかったのは征夷大將軍の地位であり、目指していたのは「武士のための政治」を自分が行うことでした。源義家の血を引く武家の名門の子孫である自分自身こそが、北条氏に代わって政治の実権を握るにふさわしいと考えていたのです。

そんな折、1335年に北条高時の子の北条時行(ほうじょうときゆき)が関東で「中先代(なかせんたい)の乱」を起こし、一時期は鎌倉を占領しました。尊氏は乱の鎮圧を口実に、後醍醐天皇の許可を得ないまま鎌倉へ向かって時行軍を追い出すことに成功すると、そのまま鎌倉に留まって独自に恩賞を与え始めるなど、後醍醐天皇から離反する姿勢を明らかにしました。

尊氏の謀反に激怒された後醍醐天皇は、新田義貞に尊氏の追討を命じられましたが、尊氏は義貞軍を打ち破ると、そのまま京都まで攻めのぼりました。しかし、奥州から北畠親房が入京すると、朝廷軍は勢いを盛り返し、敗れた尊氏は九州へ落ちのびました。

都落ちした尊氏でしたが、九州で兵力をまとめると、持明院統の光厳上皇(こうごんじょうこう)から院宣(いんせん、上皇からの命令書のこと)を受け、自らの軍の正当性を確保したうえで、再び京都を目指して東上しました。

尊氏の動きに対して、後醍醐天皇は楠木正成に摂津の湊川(みなとがわ、現在の兵庫県神戸市湊川)で尊氏軍を迎え討つよう命じられましたが、正成は尊氏に敗れて自害しました。この戦(いくさ)は「湊川の戦い」と呼ばれています。

尊氏が再び京都を制すると、後醍醐天皇は比叡山(ひえいざん)に逃(のが)れられ、光厳上皇の弟にあたる光明(こうみょう)天皇が新たに即位されたことで、再びお二人の天皇が同時にご在位されることになりました。

後醍醐天皇は京都に幽閉(ゆうへい、閉じ込めて外に出さないこと)された後、尊氏との和睦(わぼく)に応じて、天皇であることを証明する「三種の神器(じんぎ)」を光明天皇に渡されましたが、その後に隙(すき)を見て京都を脱出され、奈良の吉野へ向かわれました。

吉野に到着された後醍醐天皇は、光明天皇に渡された三種の神器は偽物であると宣言されて、新たに朝廷を開かれた後、1339年に崩御されました。かくして、京都の朝廷（＝持明院統）と吉野の朝廷（＝大覚寺統）とが並立し、半世紀以上続く「南北朝の動乱」が本格的に始まったのです。

さて、1336年に京都を支配した足利尊氏は、2年後の1338年には、北朝の光明天皇から征夷大將軍に任命され、後に「室町幕府」と呼ばれる新しい幕府を京都で開きましたが、その前途には絶えず不安がつきまっています。

その理由として、幕府を正当なものと認める後ろ盾となる朝廷が、二つに分裂していたことが挙げられます。北朝は本来の朝廷の都である京都におわしましたが、本物の三種の神器は南朝に存在するとされたこともあって、尊氏に従った新興勢力の武士の中には、北朝の正当性に疑問符をつける者もいました。

また、武士にとっての本拠地は鎌倉などの東国であるため、尊氏も本当であれば関東で幕府を開きたかったのですが、南朝がいつ北朝に取って代わろうとするか予断を許さない状態が続いたため、やむなく京都で幕府を開いたのです。このため、鎌倉には尊氏に代わる別の組織として鎌倉府（かまくらふ）が置かれたのですが、関東で鎌倉府に権力が集中したことによって、やがて幕府と対立するようになっていきました。

さらには、尊氏自身の資質にも問題がありました。尊氏は根っからの武人であったため、実際の政治は尊氏の弟である足利直義（あしかがただよし）が代行していましたが、その一方で武将にしては珍しく「優しくて良い人」だった尊氏は、功績のあった武将に気前良く領地を与えていました。

しかし、領地が増えた武将が、この後に様々な権利を得ることで「守護大名」と化したことによって、こちらも幕府のいうことを聞かなくなっていくのです。

加えて、南北朝の動乱が50年以上も続いてしまった大きな原因も、実は尊氏の「優しさ」にありました。尊氏は自身に偏諱を賜（たまわ）られた後醍醐天皇に対してどうしても非情になれず、隠岐などに追放して政治生命を断つことが出来なかったゆえに、天皇に吉野に逃げられて南朝を開かれてしまったからです。

結局、尊氏やその子で2代將軍の足利義詮（あしかがよしあきら）の頃までには南北朝の動乱は解決できず、義詮の子で3代將軍の足利義満（あしかがよしみつ）が本格的に政治を行うようになってから、時代が大きく動き始めるのです。

2. 日明貿易に秘められた義満の野望

義満が將軍となったのは1368年でしたが、まだ11歳と若かったために、管領の細川頼之（ほそかわよりゆき）が政治を代行しており、1379年に頼之が追放されてから、義満独自の政治が行われるようになりました。

義満は自分の思いどおりの政治を行うため、まずは「子飼いの軍隊」ともいうべき将軍直属の常備軍である奉公衆(ほうこうしゅう)を積極的に増強し、その費用を捻出(ねんしゅつ)するために、山城(現在の京都府南部)の土地の一部を奉公衆に与えたり、山城の荘園の年貢の半分を奉公衆に給付するという半済令(はんぜいれい)を出したりしました。

京都において兵糧を確保できるようになった奉公衆は、一年を通して将軍の近くに常駐できるようになり、結果として義満の軍事的立場も強化されることになりました。

こうして自分の足元を固めることに成功した義満は、自分の命令ひとつで動く武力を背景に、内政や外交、あるいは軍事面において強力な政治を行うことになるのです。

尊氏が亡くなった14世紀後半の頃から、南朝の勢力は時が流れるにつれて衰退していきましたが、三種の神器を有しておられるという正当性を持っていたため、幕府に反対する勢力に利用されて出兵するなど動乱がなかなか治まりませんでした。

それもこれも、朝廷が二つに分かれて争う状態が続いていたのが大きな理由でした。先の鎌倉幕府や後の戦国時代、あるいは江戸幕府など、武家政権の多くは長い伝統に基づく権威を有する朝廷の扱いに悩まされてきましたが、それが二つもあってはたまったものではありません。

なぜなら、お互いに対立している二つの勢力が、それぞれ北朝や南朝を別々に担(か)つぐことによって、お互いが朝廷の後見を得ることになり、争い事がいつまで経っても収拾がつかなくなるからです。

このため、義満も南北朝が一つになるよう工作を続け、南朝側も後亀山(ごかめやま)天皇が和睦に応じられたことで、1392年について「南北朝の合一(ごういつ)」が実現しました。

南北朝の合一は、南朝の後亀山天皇が北朝の後小松(ごこまつ)天皇に三種の神器を渡されたうえで譲位なされるという形式で行われましたが、そこには義満による巧妙な罠(わな)が仕掛けられていました。

義満が南朝の後亀山天皇に出した和睦の条件は以下のとおりでした。

- 1.三種の神器は南朝の後亀山天皇から北朝の後小松天皇へ「讓国(じょうこく)の儀式」で渡すこと
- 2.皇位の継承に際しては、南北両朝が交互に即位する両統迭立(りょうとうてつりつ)を行うこと
- 3.諸国の国衙領(こくがりょう、国の領地のこと)を南朝の所有とすること

このうち一番重要なのは1.でした。なぜなら「讓国の儀式」で譲位するという事は、後亀山天皇のご在位を、ひいては南朝の後醍醐(ごむらかみ)―長慶(ちょうけい)―後亀山という皇位の継承を正式なものとして認めるということの意味していたからです。

また、今後も両統迭立が行われるということは、後亀山天皇の子がいずれは天皇になるということ

であり、さらに国衙領の所有が認められるのであれば、南朝にとってはかなり有利な内容でした。しかし、それらはあくまで北朝と幕府が約束を守ればの話であり、実は、義満は条件のすべてを反故(ほご)にしてしまったのです。

南北朝の合一の条件のうち、まず皇位の継承の際の「讓国の儀式」は一切行われませんでした。後亀山・後小松の両天皇のご対面もなく、三種の神器が単に宮中(きゅうちゅう、ここでは朝廷の中という意味)に戻ったという形式となったのです。

これでは北朝が「失くした神器を取り戻した」ということになり、南朝の正当性が一切認められないことを意味します。また、退位された後亀山上皇も当初は正式に上皇と認められず、義満の裁定によって「不登極帝(ふとうきょくのてい)、すなわち「即位していない天皇」に上皇の地位を与えるとすることになりましたが、即位が認められなければ、後亀山上皇が「治天(ちてん)の君(きみ)」として院政を行うことができません。

両統迭立の約束も、後小松天皇の次の天皇となる皇太子が長いあいだ決められず、義満の死後に後小松天皇の子の称光(しょうこう)天皇が即位されたことで、南朝への皇位継承の道が遠くなり、さらには国衙領も、この頃までには実質的にほとんど存在していませんでした。

要するに、義満は南朝に「空手形(からてがた)」をつかませたのです。南北朝の合一に関する義満の手法は卑怯(ひきょう)かつ詐欺的なものでしたが、同時に彼の行動によって二つあった朝廷が一つにまとまったことで、それまでの混乱状態から回復して世の中が平和に向かうという皮肉な結果になりました。平和というのは綺麗事だけでは達成できないという見本のような事実ですね。

南北朝の合一は長い間の動乱に終止符を打つ効果をもたらしましたが、これ以外にも義満は自らが本格的に政治を行い始めた前後から、内政面や軍事面においてその実力をいかに発揮していきました。1378年、義満は京都の室町に「花の御所」と後に呼ばれた豪華な邸宅を造営し、以後はここで政治を行ったことから、足利氏による幕府のことを室町幕府と呼ぶようになりました。

また、義満はこの頃までに大きくなり過ぎて幕府の言うことを聞かなくなった守護大名の弱体化を目指し、1390年に美濃(=現在の岐阜県南部)・尾張(=現在の愛知県西部)・伊勢(=現在の三重県北部)の守護を兼ねた土岐康行(ときやすゆき)を滅ぼしました。これを「土岐康行の乱」といいます。

翌1391年には、西国11カ国の守護を兼ね、六分一殿(ろくぶんのいちどの)と呼ばれた山名氏(やまなし)に内紛が起きると、義満はこれに乗じて山名氏清(やまなうじきよ)を滅ぼしました。この戦いを、当時の年号から「明德(めいとく)の乱」といいます。

さらに義満は、明(みん)と勝手に貿易を行っていた周防(すおう、現在の山口県東部)の守護大名である大内義弘(おおうちよしひろ)を1399年に滅ぼすことに成功しました。この戦いは、当時の年号から「応永(おうえい)の乱」と呼ばれています。

応永の乱で大内氏の勢力を抑えることに成功した義満は、それまで大内氏が独自に行っていた明と

の貿易を、幕府として正式に行う決意を固め、1401年に明に使者を送って国交を開くと、翌1402年には明の皇帝が義満を「日本国王」に封ずるとの返書をよこし、同時に明の暦(こよみ)を送ってきました。

チャイナの皇帝から「国王」に任じられて暦を受け取るという行為は、チャイナを宗主国と認め、屈辱的な朝貢(ちょうこう)外交を行うことを意味しました。

これは、聖徳太子(しょうとくたいし)以来続いてきた、我が国の中国大陸からの独立性を損なうものでしたが、義満は自らを「日本国王臣源道義(にほんこくおうしんげんどうぎ)」と称して貿易を行いました。なお、道義とは出家した義満の法号です。

なぜ義満は朝貢外交を受け入れてまで貿易を行ったのでしょうか。主な理由として考えられるのは、貿易による莫大(ばくだい)な利益を得るためには、対等であろうが朝貢であろうが問題ないという経済重視の姿勢ですが、もうひとつの別に隠された理由がありました。

実は、義満は自らが「天皇を超える存在」として君臨するという大きな野望を持っており、明から「日本国王」に任じられること、つまり明からの「お墨付き」を得ることが、野望達成の近道になると確信していたのです。

義満は、母が皇室の血を引いていたこともあって、自身も出世街道を順調に歩んでいきました。1383年には臣下でありながら皇族同等の待遇となる准三后(じゅさんごう)となり、1394年には太政大臣(たじょうだいじん)にまで出世しました。

また、義満は自身の太政大臣の就任祝賀式に出席した当時の関白に対して、自らを拝礼して見送らせました。関白は太政大臣より上位ですから普通に考えれば話が反対ですが、これは義満が当時すでに天皇に近い待遇を得ていたことを間接的に証明しています。

さらに義満は、南北朝の合一の際に後龜山上皇に対して強引に上皇待遇を与えたように、朝廷の人事権にまで口出しを始め、天皇の子が出家して入る門跡寺院(もんせきじいん)にも、自分の子を次々と入れました。そのうちの一人が比叡山延暦寺(ひえいざんえんりゃくじ)の最高位である天台座主(てんだいざす)の義円(ぎえん)ですが、彼は後に6代将軍の足利義教(あしかがよしのり)となって、歴史の表舞台に登場することになります。

その後、征夷大將軍を辞任した義満は、子の足利義持(あしかがよしもち)を4代将軍とさせたうえで太政大臣に就任し、それから半年も経たないうちに太政大臣を辞職して出家しましたが、依然として政治の実権を持ち続けました。

将軍や太政大臣といっても天皇の臣下でしかなく、それらの身分に縛(しば)られない方が、自分の野望達成(=天皇を超える存在になること)には都合が良いと判断したのかもしれない。

1399年、義満が建立(こんりゅう)させた相国寺(しょうこくじ)の七重大塔(しちじゅうだいとう)が完成して落慶法

要(らっけいほうよう)が行われましたが、七重大塔の高さは約 109m と我が国の仏塔(ぶつとう)で一番の高さを誇っていました。

しかも相国寺は当時の京都御所のすぐ北にあり、天皇がおわす御所の上座(かみざ)の位置に、御所を見下ろすことができる巨大な建物を造営したことになりますが、義満の意図がどこにあったのかが気になるところです。

また、義満は金閣寺(きんかくじ)と呼ばれる寺院を建築したことで有名であり、これは現在の鹿苑寺(ろくおんじ)の通称となっていますが、義満の当時は金閣寺を含む一帯が北山第(きたやまてい)と呼ばれ、義満の政務地でした。

義満が政務地の象徴として建築したのが現在の金閣寺と考えられていますが、その金閣寺は1階が寝殿造(しんでんづくり)で2階が武家造(ぶけづくり、別名を書院造=しよいんづくり)、3階が禅宗様(ぜんしゅうよう)という変わった構造をしていることでも有名ですね。

実は、この金閣寺の構造にも義満の真意が隠されているのです。

金閣寺の1階は寝殿造ですが、これは皇室や貴族などの朝廷をあらわしており、2階の武家造は室町幕府を意味しています。つまり、幕府が朝廷の上に存在するという意思を義満が明確に示しているという解釈が可能になるのです。

さらにその上の3階の禅宗様は中国風ですが、これは当時明から「日本国王」に任じられていた義満自身を指していると考えられ、義満が「自分は朝廷も幕府も超えた存在である」と自ら宣言しているに等しいこととなります。

しかも、金閣寺の屋根には聖天子(せいてんし)が出現するとき世に出るとされる、チャイナの伝説上の鳥である鳳凰(ほうおう)が飾られています。全国の寺院で屋根に鳳凰があるのは、金閣寺の他にはこれを真似(まね)てつくられた銀閣寺(ぎんかくじ)と、平安時代の建築物である宇治の平等院鳳凰堂(びょうどういんほうおうどう)くらいしかありません。

寺院の屋根飾りとしては滅多に用いられない鳳凰が金閣寺に使用されている理由は、そこを普段から使用する人間、つまり「義満こそが聖天子そのものである」と自負していたからだとは考えられないでしょうか。

こうして様々な手段で自身の地位を固めた義満は、妻である日野康子(ひのやすこ)を天皇の生母と同じ地位を与えられる准母(じゅんぼ)とするなど、身内にも皇室に近い待遇を与え始めました。

さらに義満の子の足利義嗣(あしかがよしつぐ)が成人した際の儀式である元服(げんぷく)の際には、宮中で天皇の子である親王に準じた形式で行いました。

つまり、義嗣は親王と同じ待遇になったのです。ということは、近い将来には義嗣が天皇になり、

義満自身は天皇の父、つまり上皇に準ぜられ、治天の君として「天皇を超える存在」となり、我が国をほしいままに支配することになってしまふ。

皇室をいただく我が国にとって、まさに最大の危機でしたが、義満の野望は、結局は実現することはありませんでした。

なぜなら、義嗣が元服した直後の1408年に義満は病に倒れ、急死してしまったからです。それまで元気でいたのが急に体調が悪化したことから、義満が天皇を超える存在になることを恐れた朝廷などの関係者から暗殺されたのではないかと、という説が唱えられています。

その真偽は定かではありませんが、いずれにせよ、自分の野望が達成される直前でこの世を去らなければならなかったのは、義満にとってさぞかし無念であったことでしょう。

なお、義満の死後、朝廷は太上天皇(だいじょうてんのう)、つまり上皇の地位を追贈しました。幕府はこれを辞退しましたが、皇室とは直接的に縁のない義満に対して、なぜ朝廷が上皇を追贈しなければならなかったのでしょうか。

確固たる証拠が存在しない以上は、永遠の謎と言わざるを得ないのかもしれませんが。

3. 室町時代の様々な外交

さて、13世紀に起きた元寇の後、元と我が国との間に正式な外交関係は存在しませんでした。私的な商船の往来が続けられていました。1325年には建長寺(けんちょうじ)の再建費用を得るために北条氏によって建長寺船が、1342年には天龍寺(てんりゅうじ)の建立(こんりゅう)費用のために、足利尊氏によって天龍寺船がそれぞれ元に派遣(はけん)されています。

一方、南北朝の動乱の頃には、西国の武士や漁民らによって武装した船団が組まれ、朝鮮半島や中国大陸南部の沿岸を襲(おそ)うようになりました。これらの海賊(かいぞく)は「倭寇(わこう)」と呼ばれ、沿岸住民から恐れられました。

ところで、倭寇は襲来(しゅうらい)の時期によって大きく二つに分かれます。南北朝時代の頃の「前期倭寇」は、対馬(つしま)や壱岐(いき)、あるいは肥前(ひぜん)の松浦(まつら)地方を拠点とし、日本人を中心に構成されていました。

これに対して、16世紀後半からの「後期倭寇」は、平戸(ひらど)や五島(ごとう)を拠点としているものの、その大部分は中国人であり、大陸沿海での密貿易を主に行っていました。なお、後期倭寇は、我が国を統一しつつあった豊臣秀吉(とよとみひでよし)が、1588年に海賊取締令を出して厳しく対処したことで鎮圧されています。

14世紀の半ば頃までには元の勢力は衰え、1368年に朱元璋(しゅげんしょう)によって明が建国されました。明はチャイナにとって伝統的な中華思想に基づいて、近隣諸国に対して朝貢外交を求めると、

先述のとおり、足利義満がこれに応じるかたちになりました。

こうして始まった日明貿易ですが、明から交付された勘合(かんごう)という証明書を日明の両国が照合することで私貿易と区別していたので、別名を「勘合貿易」とも呼ばれています。

日明貿易は、朝貢形式を嫌った4代将軍の足利義持によって1411年にいったん中断されましたが、幕府の財政確保を優先した6代将軍の足利義教によって、1432年に再開されました。

日明貿易は、それまでの自主独立の外交路線に反した朝貢貿易でしたが、宗主国の立場である明が滞在費(たいざいひ)や運搬費(うんぱんひ)などのすべての費用を負担したので、我が国は大きな利益を得ることができました。

貿易における我が国からの輸出品は刀剣や鎧(よろい)などの武具、銅や硫黄(いおう)などの鉱産物、扇や屏風(びょうぶ)などの工芸品が中心であり、輸入品は銅銭(どうせん)が圧倒的に多く、その他には生糸(きいと)や高級織物などが輸入されました。なお、銅銭は「明銭(みんせん)」として普及し、我が国の貨幣の流通に大きな影響をもたらしました。

しかし、明の永楽帝(えいらくてい)の名が入った「永楽通宝(えいらくつうほう)」は、朝貢貿易での下賜(かし)を目的として鑄造(ちゅうぞう)されたものであり、それを日本国内で流通させることは、いかに形式的とはいえ、我が国が経済的にチャイナの傘下(さんか)に入ったことを意味していました。我が国が独自につくった銅銭は、江戸時代の「寛永通宝(かんえいつうほう)」まで待つこととなります。

さて、室町幕府が衰え始めた15世紀後半に入ると、貿易の実権は堺の商人と結んだ細川氏(ほそかわい)と、博多の商人と結んだ大内氏(おおうちし)の両者の手に移りました。貿易による利権をめぐる争った両者は、1523年に明の貿易港である寧波(ニンポー)で武力衝突しました。この争いを「寧波の乱」といいます。

両者の戦いは大内氏の勝利に終わり、以後は大内氏が貿易を独占しましたが、1551年に大内氏が滅亡すると貿易は廃絶となり、先述した後期倭寇の活動が目立つようになりました。

14世紀後半以降の朝鮮半島では、倭寇の討伐で名を挙げた李成桂(りせいけい)が1392年に高麗(こうらい)を倒して、新たに「朝鮮」を建国しました。朝鮮が我が国に倭寇の禁止と通交とを求めると、足利義満がこれらに応じたので、日朝両国は国交を開きました。

我が国と朝鮮との日朝貿易は、幕府の他にも守護大名や有力国人(こくじん、地方豪族のこと)、あるいは商人までもが参加したために、貿易船の数が非常に多くなりました。

このため、朝鮮は1443年に嘉吉条約(かきつじょうやく、別名を癸亥約定=きがいやくじょう)を結んで、対馬の宗氏(そうし)に貿易の統制権を与えたことによって、これ以降の朝鮮との貿易は主に宗氏を通じて行われるようになりました。

なお、李成桂が建国した朝鮮は、古代に存在した古朝鮮(こちょうせん)と区別するために「李氏朝鮮(りしちょうせん)」とも呼ばれています。

朝鮮は日朝貿易のために富山浦(ふざんぼ)・乃而浦(ないじぼ)・塩浦(えんぼ)の三浦(さんぼ、三つの港のこと)を開いて、また我が国からの使節の接待と貿易の管理を行うために、首都の漢城(かんじょう、現在のソウル)に倭館(わかん)を設けました。

日朝貿易は、1419年に朝鮮が倭寇の本拠地を対馬と誤認して襲撃した「応永(おうえい)の外寇(がいこう)」によって一時は中断しましたが、その後も活発に行われました。

貿易では日明貿易での勘合をまねた「通信符(つうしんぷ)」が用いられ、我が国からは銅や硫黄などの鉱産物や工芸品、あるいは後述する琉球(りゅうきゅう)貿易で入手した蘇木(そぼく、染料のこと)や香木(こうぼく、香料のこと)が輸出されました。

また、朝鮮からは当時の我が国では生産されなかった木綿(もめん)が大量に輸入され、それまでの麻(あさ)に比べて保温性が高く作業衣料に適していたために、人々に広く利用されたことで生活様式に大きな影響を与えました。

しかし、朝鮮がやがて日朝貿易を厳しく統制したために、これを不満とする三浦に住む日本人と現地役人との間で1510年に紛争が起きました。この「三浦(さんぼ)の乱」によって、日朝貿易は次第に衰退していきました。

15世紀に入っころの沖縄島では、北山(ほくざん)・中山(ちゅうざん)・南山(なんざん)のいわゆる三山(さんざん)による勢力争いが続いていましたが、中山王の尚巴志(しょうはし)が1429年に三山を統一して、首里(しゅり)を王府とする琉球王国をつくり上げました。

琉球は明との藩属国(はんぞくこく、明を宗主国とすること)の関係を保ちながら我が国とも国交を結び、海外貿易を盛んに行いました。これを琉球貿易といいます。

琉球貿易は、商船を南方のジャワ島・スマトラ島・インドシナ半島にまで行動範囲を広げて、東アジアから東南アジア一帯の諸国間における中継貿易の方式で行われました。

具体的には、琉球の商船が南方から購入してきた蘇木(そぼく、染料のこと)や香木(こうぼく、香料のこと)などを我が国の商人が買い取ったり、琉球船自らが博多まで乗り入れてもたらしたりしています。これらの商品は我が国によってチャイナや朝鮮へと転売されました。

首里の外港である那覇(なは)は、貿易における重要な国際港となって栄え、情緒豊かな琉球文化をもたらしました。なお、琉球王国の民俗の実態をうかがうことのできる史料としては、琉球の古い歌謡である「おもろ」が集められた、琉球における万葉集ともいわれる「おもろそうし」が知られています。

一方、蝦夷地(えぞち)では、14 世紀の頃に渡島(おしま)半島在住のアイヌが津軽との間を往来して、鮭・昆布・毛皮などの北海の産物を我が国にもたらしていました。これらは津軽の十三湊(とさみなと)と畿内とを結ぶ日本海交易によって、京都にまで運ばれました。

やがて奥州の住人の中から、渡島半島に館(やかた)をつくって移住する人々も現れました。彼らはアイヌから和人(わじん)と呼ばれ、津軽の豪族である安藤氏(あんどうし)の支配に属していましたが、和人の相次ぐ進出は、次第にアイヌとの関係悪化をもたらしました。

アイヌは 1457 年に首長(しゅちやう)のコシヤマインを中心に蜂起(ほおき)して和人の館を次々と攻め落としましたが、やがて渡島の領主であった蠣崎氏(かきざきし)によって鎮圧されました。この事件によって名を挙げた蠣崎氏は、江戸時代には松前氏(まつまえし)を名乗って蝦夷地を支配する大名となりました。

なお、この当時の和人の館は道南十二館(どうなんじゅうにたて)と呼ばれており、現在の函館市にある志苔館(しのりたて)が有名です。

4. 大航海時代と南蛮貿易の真実

我が国では戦国時代にあたる 15 世紀後半から 16 世紀にかけてのヨーロッパでは、ルネサンスや宗教改革によって、近代社会へと移行しつつありました。宗教改革によるカトリックとプロテスタントの激しい争いや、イスラームの世界への対抗もあって、ヨーロッパの諸国はキリスト教(特にカトリック)の布教や海外貿易の拡大を目指して世界へと乗り出しました。この時代を「大航海時代」といいます。

大航海時代の先頭に立っていたのは、早くから絶対主義の王国を形成していたイベリア半島の王国であるイスパニア(=スペイン)とポルトガルでした。両国は産業や貿易を保護して輸出を拡大し、国富(こくふ、ここでは国家の財産全体のこと)の増大を目指す重商主義に基づいて、植民地の獲得に力を注ぎました。

やがてイスパニアはアメリカ大陸に植民地を広げると、16 世紀半ばには太平洋を横断して東アジアに進出し、フィリピン諸島を占領して、ルソン島のマニラを根拠地としました。

一方、ポルトガルはインド洋で貿易を行っていたアラブ人を追い出すと、インド西海岸のゴアを根拠地として東へ進出し、マレー半島のマラッカから明のマカオにも拠点を築きました。要するに、イスパニアは西廻(まわり)りで、ポルトガルは東廻りでそれぞれアジアに進出したこととなります。

ところで、大航海時代という言葉だけを耳にすると、大海原(おおなばら)に新たな希望を見つけようとした開拓の時代という良いイメージしか浮かばないのですが、実は、この時代には多くの人々が虐殺(ぎやくさつ)されたという恐るべき側面が隠されていました。

当時のイスパニアとポルトガルとの間には、15 世紀末の 1494 年に、大西洋(たいせいよう)を東西に分

ける一本の線が引かれ、この線から東側で発見されるものはすべてポルトガルに、西側で発見されるものはすべてイスパニアに属するという取り決めが、カトリックのローマ教皇(きょうこう)の承認によって結ばれました。これを「トルデシリャス条約」といいます。

地球をまるで饅頭(まんじゅう)を二つに割るかのような、ある意味とんでもない発想ですが、これは当時の白人至上主義による人種差別に基づく当然の思想でもありました。そして両国は条約の取り決めを守りながら着実に植民地化を進め、その過程では南アメリカ大陸西側にあったインカ帝国や、メキシコ中央部にあったアステカ帝国という二つの国が滅ぼされ、国民の生命や財産、さらに文化が永遠に失われてしまうという悲劇が生じていたのです。

一方、当時の東アジア地域では、明が倭寇(わこう)の鎮圧や密貿易の禁止のために海禁政策をとっていましたが、実際には明以外にも我が国や朝鮮・琉球・安南(あんなん、現在のベトナム)などの人々が幅広く中継貿易を行っていました。そして、ヨーロッパ人による東アジアの進出は、これらの中継貿易に参加することで、莫大(ばくだい)な権益を得ようとする目的もあったのです。

1543年、ポルトガル人を乗せた明の船が九州南方の種子島(たねがしま)に漂着(ひょうちゃく、ただよい流れて岸に着くこと)しました。これが我が国に初めて上陸したヨーロッパ人です。領主の種子島時堯(たねがしまときたか)は、ポルトガル人が所有していた「鉄砲」に興味を示してこれを購入すると、家臣にその使用法と製造法を学ばせました。

手先が器用だった鍛冶(かじ)職人によって鉄砲がまたたく間に複製されると、やがて貿易港でもあった堺などにおいて大量に生産され、各地の戦国大名に売り込まれました。

鉄砲の出現は、それまでの弓や槍(やり)、あるいは騎馬隊を主力とした戦闘方法が、鉄砲による歩兵戦が中心になるなどの大きな変化をもたらしました。また、鉄砲は雨が降ると使用できないという弱点を持つ一方、雨の心配のない城の中ではいくらかでも撃てることから籠城戦(ろうじょうせん)に最適とされ、城の構築方法も、それまでの山城(やまじろ)から平山城(ひらやまじろ)、あるいは平城(ひらじろ)へと変化していきました。

ちなみに、ポルトガル人は鉄砲そのものを我が国に購入させる目的で種子島にわざと漂着したのではないかとも考えられています。その野望は我が国で鉄砲が大量生産されたことで潰(つい)えましたが、火薬の原料となる硝石(しょうせき)が、当時の我が国では生産されなかったことから、これを輸入することで貿易が成立することになりました。

我が国との貿易が大きな利益をもたらすことを知ったポルトガル人は、やがて毎年のように我が国に來航するようになりました。さらにはイスパニア人も1584年に肥前の平戸(ひらど)に來航して、我が国との貿易を始めました。

当時の我が国では、ポルトガル人やイスパニア人のことを南蛮人(なんばんじん)と呼んだことから、彼らとの貿易を南蛮貿易といいます。

南蛮貿易は、先に我が国に上陸したポルトガルを主体にして行われました。我が国には鉄砲やその火薬・香料・生糸(きいと)などが輸入され、我が国からの輸出品としては、当時生産量が増加していた銀のほか、金や刀剣がありました。

また当時の貿易港としては、松浦氏(まつらし)の平戸や大村氏(おおむらし)の長崎、大友氏(おおともし)の豊後府内(ぶんごふない、現在の大分市)など、九州地方が中心でした。

大航海時代のきっかけのひとつとなった宗教改革によって、カトリックは新興のプロテスタントの圧迫を受けることになりましたが、巻き返しを図りたいカトリックはイエズス会を設立して、アフリカやアジアなど、ヨーロッパ以外の各地での布教を目指しました。

イエズス会による布教活動は、イスパニアやポルトガルによる植民地政策と一体化して行われました。布教の拡大によって地元住民にカトリックを信仰させ、その後に「神の名の下(もと)に」侵略を仕掛けることで容易に目的を達成できるという、いわばお互いの利害が一致した結果でした。

我が国との南蛮貿易も、実は布教活動と一体化させていたのであって、1549年にイエズス会のフランシスコ＝ザビエルが鹿児島に到着すると、領主である島津貴久(しまづたかひさ)の許可を得て布教活動を開始しました。

ザビエルは鹿児島から京都にのぼった後、山口の大内義隆(おおうちよしたか)や豊後府内の大友宗麟(おおともそうりん、別名を義鎮=よしげ)らの大名の保護を受けてキリスト教(=カトリック)の布教活動を続けました。

なお、当時のキリスト教はキリシタン(=切支丹)、あるいは天主教(てんしゅきょう)と呼ばれています。

フランシスコ＝ザビエル自身は2年あまりで我が国を離れましたが、我が国における布教活動に道筋をつけたことで、この後もルイス＝フロイスなどの宣教師が相次いで来日して、我が国に教会堂である南蛮寺(なんばんじ)や、宣教師の養成学校であるコレジオ、神学校(しんがっこう)であるセミナリオを次々と建てました。

ポルトガル船がカトリックの布教を認めた大名領にしか入港しなかったこともあって、各地の戦国大名の多くは南蛮貿易による権益の欲しさから宣教師の布教活動を保護するばかりでなく、中には自らが洗礼を受けてキリシタン大名となるものも現れました。

キリシタン大名のうち、九州の大友宗麟や大村純忠(おおむらすみただ)、有馬晴信(ありまはるのぶ)らは、イタリア人宣教師のヴァリニャーニの勧めによって、1582年に少年使節をローマ教皇のもとに派遣しました。これを、当時の年号から「天正遣欧使節(てんしょうけんおうしせつ)」といいます。

カトリックによる教えは、ヨーロッパの進んだ文化にあこがれたり、あるいは既存の仏教を中心とした宗教勢力が権益を求めて争い合う姿勢に不満を持ったりした人々の間で急速に広まっていきま

したが、その一方でキリシタン大名の大村純忠が、信仰心のあまり自領の長崎をイエズス会に寄進(=神社や寺院などの施設に金銭や物品を寄付すること)するという前代未聞の行為も見られ、カトリックに潜(ひそ)む我が国侵略の野望は、水面下で確実に広がっていきました。

1560年の桶狭間(おけはざま)の戦いで名を挙げ、破竹の勢いで天下取りに向かって前進していた織田信長(おだのぶなが)は、南蛮貿易による権益や、西洋の進んだ文化や技術を手に入れるために、キリスト教(=カトリック)を保護しました。

ちなみに、カトリックの宣教師から地球が丸いことを知らされた信長は、すぐにそれを理解したそうです。16世紀の日本人とはとても思えない、信長の柔軟な発想力がうかがえるエピソードですね。

さて、信長は天下統一を目前に配下の明智光秀(あけちみつひで)に裏切られ、1582年に起きた本能寺の変で自害に追い込まれましたが、信長の統一事業を受け継いだ豊臣秀吉も、貿易の権益を求めて当初はカトリックの布教を認めていました。

しかし、そんな彼が、カトリックとイスパニアによる世界侵略の野望に気づく日がやって来たのです。

5. 秀吉の外交政策 ～「やられる前に、やれ」

1587年、島津氏(しまづし)を倒すために九州平定に乗り込んだ秀吉を、カトリックのイエズス会の宣教師が当時の我が国に存在しない最新鋭の軍艦を準備して出迎えました。その壮大さに驚いた秀吉は、イエズス会による布教活動には、我が国への侵略が秘められているのではないかとの疑念を持ち始めました。

そして、現地を視察した秀吉が、彼に待ち受けていた「3つの信じられない出来事」を目にしたことによって、疑念が確信へと大きく変化したのです。

秀吉が九州に上陸してまず驚いたことは、外国への玄関口でもある重要な港町の長崎が、先述のとおり、キリシタン大名であった大村純忠によってイエズス会に寄進されてしまっていたことでした。

いかに信仰のためとはいえ、我が国古来の領地を外国の所有に任せるという行為は、自身による天下統一を目指した秀吉にとっては有り得ないことであると同時に、イエズス会やその裏に存在したイスパニアの領土的野心に嫌でも気づかされることになりました。

次に秀吉を待ち受けていたのは、キリシタン大名の領内において無数の神社や寺が焼かれていたという現実でした。これらはカトリックの由来であるキリスト教が一神教であり、キリスト以外の神の存在を認めなかったことによって起きた悲劇でもありましたが、秀吉の目には、我が国の伝統や文化を破壊する許せない行動としか映りませんでした。

さらに秀吉を驚かせたのが、ポルトガルの商人が多数の日本人を奴隷(どれい)として強制連行してい

た事実でした。支配地の有色人種を奴隷扱いするのは、白人にとっては当然の行為であっても、天下統一を目指すことによって、国民の生命や財産を守る義務があると自覚していた秀吉には、絶対に認められない行為でした。

イエズス会とイスパニアによる我が国侵略の野望に気づいた秀吉は、これらの事実に激怒するとともに、直ちに宣教師追放令（＝バテレン追放令）を出してカトリックの信仰を禁止し、長崎もイエズス会から没収して秀吉の直轄地（ちよっかつち）としました。しかし、秀吉は権益もあつて南蛮貿易そのものを禁止することはできず、結果として禁教政策は不徹底に終わり、カトリックはその後も広まっていきました。

なお、1596年にイスパニアの商船が土佐（現在の高知県）に漂着した際に、乗組員が「イスパニアは領土征服の第一歩として宣教師を送り込んでいる」ことを、世界地図を示して誇ったという出来事があり（これをサン＝フェリペ号事件といいます）、激怒した秀吉が京都の宣教師と信徒を捕えて長崎で処刑するという結果につながりました（これを「26 聖人殉教」といいます）。

さて、秀吉が気づいたイスパニアによる我が国侵略の野望ですが、実際にイスパニアやイエズス会はどう動いたのでしょうか。当時の我が国は、合計で数十万の兵力や、数を同じくする鉄砲による強大な火薬力を持っていたこともあり、イスパニアは、直ちに我が国を侵略することは現実的には難しいと考えていました。

そこで、イスパニアは勢力の衰えていた明に着目し、我が国での布教に成功したキリシタン大名を利用して彼らの兵力で明を征服すれば、返す刀で我が国を攻めることで侵略も可能になる、と考えました。つまり、明がイスパニアによって滅ぼされれば、次は我が国が確実に狙われるということなのです。

この構図は、鎌倉時代に起きた元寇（げんこう）そのものでもあり、イスパニアの動きをつかんでいた秀吉にとっても気が気ではありませんでした。明がイスパニアによって征服されるのを黙って見ているわけにはいかないとすれば、秀吉にはどのような策があるのでしょうか。

我が国への侵略の前提として明を攻めようとしたイスパニアでしたが、中国大陆へ直接攻め込めるだけの大きな軍艦は所有していたものの、それこそ地球の裏側まで多数の兵を連れて行くことができず、キリシタン大名の兵力を借りなければならぬと考えるほどの兵力不足でした。一方の我が国ですが、兵力や鉄砲による火薬力こそは充実していましたが、外航用の大きな船を建造するだけの能力が当時はありませんでした。

これらの点に着目した秀吉は、イスパニアと我が国とが同盟を結んで両国が共同して明を征服し、戦後は明国内でのカトリックの布教を許す代わりに、イスパニア所有の外航用の軍艦を売却してもらうという条件を示すことによって、外交によるイスパニアとの妥協を目指しましたが、武力による我が国の侵略を断念していなかったイスパニアに拒否されてしまいました。

進退窮（きわ）まった秀吉は、自分自身がイスパニアよりも先に明を征服してしまう以外に、我が国が

侵略から免れる方法はないと覚悟を決めました。まさに「やられる前に、やれ」。先述した数十万の兵力や鉄砲による強大な火薬力を投入すれば、我が国単独での大陸の征服も不可能ではないと考えたのです。

秀吉のこうした決断は、天下が統一されたことで今後の領土獲得の機会を失い、力を持て余していた兵士たちに好意的に迎えられました。

古代マケドニアのアレクサンドロス大王や、モンゴルの英雄チンギス=ハーンがかつて挑んだ、巨大な兵力を持つ人間が当然のように行う遠征という名の道を、彼らと同じように秀吉も歩み始めたのでした。

自ら計画した明の征服に対して「唐入(からいり)」と名付けた秀吉でしたが、先述したように我が国は明へ直接攻め込むことが可能な大きな船の建造能力が当時はありませんでした。だとすれば、我が国と地理的に近い朝鮮半島を経由して攻め込む以外に方法がありません。

秀吉は対馬(つしま)の宗氏(そうし)を通じて当時の朝鮮半島を支配していた李氏朝鮮(りしちょうせん)に対して「我が国が明へ軍隊を送るから協力してほしい」と使者を出しましたが、立場上は明を宗主国と仰いでいた李氏朝鮮は、秀吉の要請を拒否しました。

このため、秀吉は明を征服する前提として、やむなく朝鮮半島から攻め込んでいったのです。これこそが、1592年に起きた一回目の朝鮮出兵である「文禄(ぶんろく)の役(えき)」の本当の理由でした。

肥前(現在の佐賀県)の名護屋(なごや)に本陣が置かれた日本軍は、加藤清正(かとうきよまさ)らが率いる15万の大軍で朝鮮半島に上陸して、当初は優位に戦いを進めましたが、李氏朝鮮の李舜臣(りしゆんしん)の活躍があったり、縦に伸びきった我が国の軍勢の補給路が断たれたことで、多くの兵が飢えや寒さに苦しんだりするなど、戦局は次第に我が国にとって不利な状況となり、やがて休戦となりました。

その後、我が国と李氏朝鮮や明との間で和平交渉が行われましたが、1596年に我が国に使者を送った明が「秀吉を日本国王に封ずる」という、一方的な内容の国書を送り返したこともあり、失敗に終わりました。

翌1597年に秀吉は再び朝鮮半島を攻めました。これを「慶長(けいちょう)の役」といいますが、日本軍は当初から苦戦を強いられました。

その後、1598年に秀吉が亡くなったことで休戦となり、我が国は朝鮮半島から撤退しました。

秀吉の二度にわたる朝鮮出兵は、当初の「唐入り」の目的を果たせなかったばかりか、朝鮮半島へ多大な影響を及ぼしたのみならず、我が国にも豊臣家を始めとして多数の損害をもたらした結果となってしまったのです。

6. 朝鮮出兵の真実と豊臣家のその後

ところで、秀吉の出兵によって大きな被害を受けた朝鮮半島の人々の恨みは今もなお深く、文禄の役は壬辰倭乱(じんしんわらん)、慶長の役は丁酉倭乱(ていゆうわらん)と呼ばれるなど、秀吉はまさに悪魔のような人物とみなされているのが現実です。

加えて、秀吉は最近の国内の歴史学説においても「理解不能な最大の愚行」「晩年の秀吉が正常な感覚を失ったことによる妄想」などといった散々な扱いを受けており、さらには多くの歴史教科書で、彼の行為を「朝鮮侵略」と断じています。

しかしながら、秀吉が朝鮮半島へ攻め込んだ本当の理由は、イスパニアへの対抗として明を先制攻撃しようと計画した際、その通り道となることを李氏朝鮮が拒否したからであるということをお忘れたいけません。可能性の有無はともかくとして、仮に朝鮮が我が国の「唐入り」に協力していれば、秀吉から攻められることはなかったでしょう。

秀吉の最終目標はあくまで「明の征服」であり、朝鮮半島そのものを侵略するという意図はなかったといえます。それなのに、秀吉の行為を「朝鮮侵略」と一方的に断定することは、秀吉の真意を見誤るのみならず、歴史的にも正しい表現とはいえません。従って、ここはやはり「朝鮮出兵」と表記すべきなのです。

また、秀吉に対する評価についても、朝鮮半島の人々の思いを受け止める一方で、世界史の原則である「ある民族にとっての英雄は、他民族にとっての虐殺者(=戦争勝利者)である」という視点からも眺(なが)める必要があるのではないのでしょうか。

朝鮮半島の人々から見れば、秀吉は確かに許されざる侵略者ではありますが、その一方で、我が国にとっては天下統一を果たした英雄であり、戦国時代を終わらせて世の中に平和をもたらすきっかけをつくってくれた恩人でもあります。

秀吉と同じように海外に遠征したアレクサンドロス大王やチンギス=ハーンにしても、英雄としての顔を持つ一方で、彼らによって虐殺されたり、滅ぼされたりした民族が大勢いるという現実を考えれば、我が国に関わらず、違う国同士で共通した歴史認識を持つということが、どう考えても不可能ではないかという思いがします。

だからといって、その国にはその国で語り継ぐべき歴史が存在する以上、他国の歴史認識を一方的に間違いと決め付けることは難しいですが、逆に言えば、我が国が他国に対して、ある意味へりくだってまで他国の歴史認識に合わせる必要もない、ということにつながるのではないのでしょうか。

秀吉による朝鮮出兵に限らず、私たちは日本人なので、他国の感情には理解を示しつつも、我が国の立場で堂々と歴史認識を持てばよいのであり、我が国の公教育においても当然そのような歴史を伝えていかなければならないでしょう。

ところで、秀吉による朝鮮出兵は失敗に終わりましたが、だとすれば待っていましたとばかりにイスパニアが我が国との戦いで体力の弱った明を攻め込みそうなものですよ。しかし、現実にはイスパニアが明を侵略することはありませんでした。なぜでしょうか。

それは、秀吉が死亡した頃までに、イスパニアの勢力が衰えを見せ始めていたからなのです。

秀吉が死亡した 1598 年にさかのぼること 10 年前の 1588 年、イスパニアの無敵艦隊がイギリスとのアルマダの海戦で敗北しました。この戦いは、イスパニアとイギリスとの勢力が逆転するきっかけとなり、これ以降のイスパニアは、東洋に軍事力を割(さ)く余裕がなくなってしまったのです。

もしイスパニアがアルマダの海戦に勝利していれば、明の征服も成功していたかもしれません。そうなれば、我が国の運命がどうなったのか見当もつきませんが、間違いなく断言できることは、アルマダの海戦の結果が、遠く我が国にも大きな影響を及ぼしたということです。

また、明は秀吉の出兵から約半世紀後の 1644 年に、満州の女真族(じょしんぞく)のヌルハチによって滅ぼされ、新たに清(しん)が誕生するわけですが、清が建国できた原因の一つに、明が我が国と戦ったことで勢力が低下していたという事情があったことは間違いありません。

これらの事実を知れば知るほど、世界の歴史にも大きな流れがあり、それが我が国における歴史にすべてつながっていることがよく理解できますね。秀吉による朝鮮への出兵も、こういった世界史のレベルから見るべきだと私は思います。

さて、朝鮮出兵の失敗は結果として豊臣家による支配に大きな悪影響を与えましたが、それに加えて豊臣家には「後継者の不在」という致命的な欠陥がありました。

秀吉の正妻のおね(後の北政所=きたのまんどころ)の間には子がなく、甥(おい)の秀次(ひでつぐ)を後継者に指名して関白の地位を譲りましたが、1593 年に側室の淀殿(よどどの)が秀頼(ひでより)を生むと、実子に跡を継がせたいと思うようになった秀吉は、次第に秀次を遠ざけるようになりました。

そして 1595 年、秀吉から謀反(むほん)の疑いをかけられた秀次は高野山に入って出家しましたが、その後に切腹を命じられ、また秀次の女子供を含む一族郎党の 39 人が京都で処刑されました。

それまでの「人たらし」の面影が微塵(みじん)も感じられない、秀吉による冷酷な行動は、我が子可愛さからきたものであると同時に、独裁者となったことで、彼の猜疑心(さいぎしん、相手の行為などを疑ったりねたんだりする気持ちのこと)が強くなったことが理由であるとされています。

確かに秀吉の行為は、同じく独裁者となった信長の晩年と共通するところが見受けられますが、いずれにせよ、秀次一族の虐殺が、実は豊臣家のその後の運命を決定づけてしまったのです。

そもそも、秀次に謀反の意図が仮にあったとしても、一度出家した者に対して切腹を要求するという行為は、当時としても考えられないことでしたし、また、一族郎党を公開のうえ処刑したことは、

いかに戦国時代の風習が残っていたとはいえ、あまりにも「やり過ぎ」でした。

加えて、秀次やその一族を処刑したことは、数少ない豊臣家の親族をさらに弱める結果となり、いかに実子の秀頼が存在するとはいえ、成人した親族が一人もいなくなったことが、豊臣家の将来に暗い影を落とすことになりました。

秀吉は1598年に病気のため死の床に就(つ)きましたが、彼の実子である秀頼はまだ6歳と幼少だったこともあり、家康などに秀頼の行末(ゆくすえ)を依頼する直筆の書状が残されています。

間もなく秀吉は「露(つゆ)と落ち 露と消えにし わが身かな 浪速のことは 夢のまた夢」という辞世を残して62歳でこの世を去りましたが、秀頼と豊臣家の将来を託された際に、笑顔で応えた家康は内心でこう思っていました。

「太閤殿、貴殿が織田家に対してそうなさったように、今度は自分が豊臣家を出し抜いて天下を取る番ですな」。

秀吉の死からわずか2年後の1600年に起きた関ヶ原の戦いを経て、徳川家による江戸幕府が我が国を支配する一方で、豊臣家は1614年から1615年にかけての大坂の役で滅亡しました。

なお、いわゆる秀次事件に巻き込まれて秀吉の不興(ふきょう)を買った多くの大名が、関ヶ原の戦いで家康率いる東軍に所属しており、我が子可愛さが余っての秀吉による残酷な行為が、結果としてその後の豊臣家にとって逆らえない落日をもたらしたともいえそうです。

さて、その後約260年間続いた、江戸時代における豊臣家の扱いは不遇極まりないものでしたが、明治維新を迎えると名誉を回復し、京都や大阪など各地に豊国神社(とよくにじんじや、または「ほうこくじんじや」)が創建されるとともに、当時の大阪市長であった関一(せき・はじめ)氏が、昭和天皇の御即位記念事業として民間からの寄付を募ったことにより、昭和6(1931)年には大阪城の天守閣も再建されました。

晩年の朝鮮出兵の失敗がやや印象を悪くしているものの、乱れに乱れた天下を統一し、最終的には関白にまで出世した豊臣秀吉の一生は、その破天荒(はてんこう、今まで誰もしたことのないことをすること)ぶりが著しいですね。

外国の評価を気にすることもなければ、国内における謂(いわ)れなき批判に耳を傾ける必要もありません。私たちは日本人として、低い身分から関白へと「日本一出世をした男」の英雄譚(えいゆうたん)を、今後も堂々と子孫に伝え広めるべきではないでしょうか。(続く)

主要参考文献：「逆説の日本史 7 中世王権編」 (著者：井沢元彦 出版：小学館)
「逆説の日本史 10 戦国霸王編」 (著者：井沢元彦 出版：小学館)
「逆説の日本史 11 戦国乱世編」 (著者：井沢元彦 出版：小学館)
「新版 新しい歴史教科書 中学社会」 (出版：自由社)
「詳説日本史 B」 (出版：山川出版社)
「日本人の誇りを伝える最新日本史」 (出版：明成社)
「年代ごとに読める歴史事典 最新日本史教授資料」 (出版：明成社)

YouTube 再生リスト「日本外交史 その参」

<https://www.youtube.com/playlist?list=PLeZrZWY-wML4y93nqlMvmeBYYkBsajdo5>

黒田裕樹の歴史講座

<http://rocky96.blog10.fc2.com/>